

「陸軍」(火野葦平)

幕末の小倉城下に商家を營む高木友之丞といふ變物がゐた。維新の騒動の折、長州に行つて奇兵隊に参加し、山縣有朋や乃木希典ら陸軍草創期の傑物と知合ふ。友之丞は乃木が小倉聯隊長の時、官舎を訪ねて赤瓢箪に入つた酒を御馳走になり、感激して赤瓢箪を貰ひ受け高木家代々の家寶とする。彼の長男友彦は陸軍士官として日露戰爭に従軍し、退役して商賣を始めるが、父の遺した「大日本史」を熟讀して「君に忠義」の精神に感奮し、「軍人ハ忠節ヲ盡スヲ本分トスヘシ」云々の「軍人敕諭」を尊崇して子弟を厳しく仕附ける。友彦の長男伸太郎は入營して一兵士として兵役に就き、兵隊としても人間としても成長する。大東亞戰爭では中國からフィリピン迄赤瓢箪を携へて轉戦し、命懸けの任務を果す途中で重傷を負ひ、海に沈みかけた處を海面に浮かんだ腰の赤瓢箪の御蔭で命拾ひをするが、やがて收容された野戰病院で死亡する。

以上、幕末から日清日露を経て大東亞戦争に至る迄の、陸軍と強い絆で結ばれた高木家三代の男達の、個我を超える「尊いもの」を信じて直向きに生きる姿を、作者の火野は陸軍の底邊に生きる庶民の日常から目を離す事なく、即ち「小さな場所に足を置くことを常に心がけて」（「後書」）描いたのだが、元來、「陸軍」は、日本の敗色が漂ひ始めた昭和十八年五月から一年間朝日新聞に連載されたもので、昭和二十年八月二十日に單行本として刊行される筈だった。無論、刊行は見送られ、上下二巻の中公文庫版として世に出て話題を呼んだのは平成十二年八月であつた。

時流に阿つて都合の悪い過去を都合良く忘れたがるマスコミの輕佻浮薄は昔も今も變らぬが、「陸軍」には今の日本人が忘れて了つた過去の日本人の姿が活寫されてをり、取分け火野が實母について云つた「傳承を自分の肉體として生きてきた庶民」（「父母の言葉」）の姿は頗る印象的であつて、それを誰よりも體現するのが友彦の妻ワカである。彼女は無學で迷信家の田舎者だつたが、「男の子は天子さまからのあづかりもの」とか、「東の方に足を向けて寢てはいけない」とかと子供達に説き聞かせる時は、「なんのわざとらしさもな」く、「身體のなかに溜つてゐるものが、ふつとひとりでに洩れるやうな工合に」語るのであつた。友彦はさういふ

妻を見て、「大義を鹿爪らしく説く自分が（中略）いかにも見すばらしく思へ」て、「ああ、自分は家内に及ばない」と思ふ。ワカは息子達が軍服を着る年頃になると、「天子さまにお返しすることができた」と、「惜しげもないやうに、顔色を變へ」ずに云ひ云ひしたが、息子達の死を知ると、「氣絶せんばかりに悲しんで、泣き」、暫くは「たれの慰めの言葉も耳に入らなかつた」のである。

上は乃木大將から下はワカの様な無學な庶民に至る迄、「傳承を自分の肉體として生き」る日本人がさして遠くない過去に確實に存在してゐたのであり、さういふ日本人の姿を描く事によつて、「陸軍そのものを書くよりも、その中に顯現された精神のありどころを確かめる」事に専念したといふ火野の「後書」の言葉に嘘はない。「陸軍」ばかりではない。火野の有名な従軍記「麥と兵隊」「土と兵隊」「花と兵隊」の所謂「兵隊三部作」を読めば、戦争を闇雲に否定するばかりの今の大方の日本人とは全く異なる日本人の姿に我々は出遭ふ事になる。例へば「花と兵隊」に出る或る陸軍伍長は前線にあつて、「戦争の中に人間としての生き方を求めることが大切」だと熱つぽく語る。彼は殺し殺される戦場にあつて己が人間的道德的成長を眞剣に求めたのだ。大日本帝國臣民と日本國民とは何故かくも違ふのか。（「陸軍」、中公文庫）